

言語進化論のためのフレームワーク

オーガナイザー：呉羽 真（京都大学）

提題者：三木那由他（京都大学）、呉羽 真、加地仁保子（京都大学）

言語学の誕生以来タブー視されていた「言語の起源」の探求が、この 20 年間に復興してきている。しかし、よく言われるように、言語には、化石のように、その起源を直接的に示す証拠はない。言語進化論においてわれわれにできることは、依然として、間接的なデータに基づいてよくできたシナリオを描いてみせる、ということ以上ではない。近年様々な分野から挙げられている豊富なデータは、必ずしもこのテーマに関する議論を收拾する方向に向かっているようには思われない。

こうした状況下にあって重要なことは、「言語は何のために進化したか」といった検証不可能な問題について徒に思弁を費やすよりは、こうした提案の前提になっている、各分野（言語学、心理学、神経生物学、遺伝生物学、進化生物学など）における理論的枠組みを比較検討し、他分野における枠組みとの接合の可能性を探る、という方向にある。このように見るならば、言語進化に関する諸説は、その枠組みから、以下三つの代表的な立場に分類することができるだろう。

- (1) 言語は非適応的な生物学的（遺伝的）進化の産物である（Chomsky など）。
- (2) 言語は自然選択による適応的な生物学的進化の産物である（Pinker、Jackendoff など）。
- (3) 言語は（生物学的進化に加えて）文化的進化の産物である（Tomasello など）。

本ワークショップは、言語進化に関する議論を「おとぎ話」にしないために、対立する諸説の各分野における理論的枠組みを整理し、実質的な対立点を検討することを通して、経験的探求への道を拓くことを目指す。各提題者は、それぞれ言語理論、発達理論、進化理論に関して、それぞれの説において採用されている枠組みを取り上げる。